

「働くことが怖い」

村上 玄田先生は、若者の「働く」をめぐる現状をどう見えていますか？

玄田 まさにそこが「これからの働き方研究会」の出発点なのですが、若者の働くことへのイメージが急速に変わりつつあると実感する出来事があったんです。

私は、研究が中心の社会科学研究所の所属なので、学部生とはふだんあまり接点がないんですが、3年前から去年まで法学部と経済学部で



対談 若者の「働く」を考える

玄田 有史 × 神津 里季生

東京大学社会科学研究所教授

連合会長

進行 | 村上陽子 連合総合労働局長



読者アンケート回答者から抽選で5名様にプレゼントします。巻末をご覧ください。

労働経済を教えることになりました。授業の感想や質問には必ずメールで答えるようにしていたのですが、多くの内容に驚かされた。「いつから働くことがこんなに怖いことになったのか」と…。ちょうど東大を卒業して電通に入社した高橋まつりさんの過労自殺が明らかになったりして、学生たちは他人事とは思えなかったのでしょう。寄せられるメールからは、「働くことが怖い」という思いが強烈に伝わってきた。**村上** 恵まれていてる立場であるはずの東大生が、働くことが怖いと…。

出版された。全労済協会が2017年6月から1年をの成果をまとめたものだ。研究会の主旨であり、本の働くことへのイメージが急速に変わりつつある。希望その道標を求めて議論を重ねた」と振り返る。と神津会長が語り合った。

今年10月、『30代働く地図』と題する本をかけて開催した「これからの働き方研究会」の編者である玄田有史東京大学教授は「若者を持って働いていくためには何が必要なのか。さて、どんな道標が示されたのか。玄田教授

た。2000年代に入ると、厳しい雇用情勢を背景に、「居場所がない」「誰からも必要とされていない」と悩みが深刻化していきましたが、今やブラック企業や過労自殺など、働くことにまつわる悲惨な報道に毎日のように接する中で、若者は「働くことが怖い」という不安を抱えるようになっていく。

そんな時、全労済協会から「これからの働き方研究会」へのお誘いをいただきました。現状については、メンバーの中でもいろいろな意見がありました。それは若者自身の問題というより、そう思っている会社や社会全体の問題ではないかという認識を共有して研究会をスタートしました。村上総合局長にも、佐藤博樹中

揺らぐ安心社会の基盤

村上 とても有意義な経験になりました。労働組合も、若い人たちとの接点を広げようと努力してきました。村上総合局長にも、佐藤博樹中

時の不安が大きいです。でも、「安心」の一つの基盤である雇用のセーフティネットがきちんとあれば、我慢しなくても、安心して次のチャレンジができる。

村上 玄田先生なら、なんと答えますか？
玄田 安心とは、「なんとかなる」という見通しを持つことでしょうか。

社会科学研究所では、2005年から「希望学」を始めました。21世紀に入って、「希望が持てない」という人が増え、データでもそれが裏付けられた。そこで、「希望とは何か」というところから研究をスタートしたのですが、「将来、絶対大丈夫」と思えることを希望しても、現実にはむずかしい。人生にはいつ何が起きるかわかりません。災害も頻発する。そういう中でも、最悪の事態は防げるという見通し、なんとかなるという手応えを持つことが、今の時代では「希望」につながると思います。それはすべて自力でということではない。「あそこに相談に行けばなんとかなる、助けてくれる」と思えば、希望も見えてくる。

神津 「なんとかなる」というのは、見通しを持ってそう思うということですね。

玄田 そうなんです。沖縄に「なんくるないさ」という言葉があるでしょう。何もしなくてもいいという意味だと思われているけど、そうじゃない。一人ひとりができることを精一杯やれば、あとは神様が見てくれるという意味だそうなんです。

もう一つ、「希望」と「働く」ことは、密接に

私が子どもの時は、日本が高度経済成長長期を迎え、今日より明日は良くなるという豊かさ、将来への希望や安心を当たり前前に感じることができた。ところが、ここ20年は、賃金も物価も上がらないデフレになって安心社会の基盤が大きく揺らぎ始める。非正規雇用が増え、長時間労働が深刻化し、セーフティネットの脆弱さがあらわになったのに、それにどう対処するかというビジョンがまだまだ明確に示されない。そんな現状が、若い人の気持ちの持ちようにつながっているのだと思います。連合は、2010年に「働くことを軸とする安心社会」を発表しましたが、それはまさに安心社会の基盤を再構築しようという提言なんです。

玄田 神津会長は、もし、若い人に「安心して何ですか？」と聞かれたら、なんとお答えになりますか？
神津 一言でいえば、「我慢しなくて済むこと」かな。やはり不安だから我慢してしまう。ブラックな職場で働き続けてしまうのも、辞めた



神津里季生

連合会長

つながっていることも発見しました。秋田県の藤里町は、人口3000人ほどで高齢化率4割の過疎の町です。介護事業を担う社会福祉協議会が、お年寄りに「心配なことは？」と聞いたところ、「子どもがひきこもっている。自分が死んだらどうなるのか心配でたまらない」という相談をいくつも受けた。実態を調査すると、その数100人以上。放っておけないと、カラオケ大会や卓球大会を企画したんですが、誰も出てきてくれない。ところが、社協が臨時アルバイトを募集すると、応募してきた人がいた。ひきこもっていても、本当は「働く」ことを求めているのだとわかって、働ける場をつくる取り組みを始めました。そば打ちやお年寄りの買い物サポートの仕事などを通じて、ひきこもっていた人たちは「自分は社会で必要とされている」と実感できるようになり、地域の宝になったんです。

神津 働くことを通じて、生きがいを持ち、社会に参加していく。まさにそこが連合の「働く

仕事は、NGO向け小規模無償援助。スラムの生活改善、山村の井戸掘り、幼稚園建設など、人々の暮らしに密着した援助を担当して、「援助」とは決して「与える」ものではないと知りました。多くの得難い経験をしましたが、何より日本という国を外から見ることができて良かったと思っています。

玄田 私は、30代で初めて本を書いたんですが、30代って、良い意味でも悪い意味でも、自分の限界や立ち位置が見えてくる時期だと思っんです。簡単に夢を諦めるとも言われますが、限界に向き合うことで、仕事や人生の戦略を立てられるようになる。弱みを認識することで強くなれる。**神津** 若い人たちが「働くのが怖い」と思うのは、完璧じゃないと認められないと思っ込んでいるからかもしれないですね。でも、人間誰しも弱点はある。互いに認め合えば、人間関係もうまくいく。

玄田 おっしゃる通り、限界を自覚することの

ことを軸とする安心社会」の最大のポイントでもあるんです。

玄田 働くことが怖いという若者に対して、「こうすれば大丈夫」という答えはない。でも、働く上での道標や地図のようなものがあればと思っただんです。地図には、答えは書いてないけど、どこに進めばどこにたどり着くのかは見通せる。

村上 そうでした。研究会では、「こうでなければ」という議論ではなく、「こっちにも行ける」「こんな考え方もある」という話をしながら、「働く地図」が描かれていきました。

神津 人生のある時期、時には道に迷いながらも、あちこち歩いてみるのは大事なことだと思います。

玄田 最近スマホのナビ機能で、最短ルートが瞬時に検索できて、地図なんて古くさいというイメージがあるかもしれませんが、地図には、ルートを自分の判断で選べる自由がある。思いがけない人や場所との出会いもあるかもしれない。職業人生を自分の足で歩き続ける人たちのために、これからどんな通りや場所が現れてくるのか、その「働く地図」を示せばと、この本を編集しました。

これからの「働き方」の道標とは？

人生の選択を迫られる30代

村上 さて、その道標についてですが、ターニングポイントの意味は、同じく限界を有する人々への共感と配慮の広がりを持つようになることなんです。

村上 『30代の働く地図』で特に伝えたかったことは？

玄田 ぜひ全編お読みいただきたいのですが、いくつかポイントを紹介します。

「働き方改革」については、単に労働時間削減だけでなく、時間の使い方や自由度や選択幅を広げるなど、時間の質の改善こそ重要だと投げかけました。

「新しい働く場所」への道標も提示しました。転職、副業、兼業、さらに「テラーワーカー」と呼ばれる、柔軟かつ短時間の新しい働き方について、その課題と可能性を示しました。

報酬と教育訓練については、実践的な短期講座を活用し、今の仕事に足りないスキルを速やかに補うことが、賃金を増やす効果を持つことも提案しました。これは非正規雇用で働く人たちに

とつても、希望の持てる事実です。職場の労働組合活動については、村上さんが執筆されています。働き方の見直しを実現するには、労使のコミュニケーションがますます重要になる。それが今回の研究会における最大の発見でした。

村上 研究会で働き方改革についてお話しする機会をいただきましたが、長時間労働の是正も、非正規労働者の処遇改善も、やはり職場のコミュニケーションが大事だと申し上げました。労使はもちろん、同じ職場で働く人たちが互いに知り合う横のコミュニケーションが職場のい



村上陽子

連合総合労働局長

(『30代の働く地図』第11章「良い職場をつくるのは誰? -労働組合の本当の執筆」)

進行

ゲットを「30代」にしたのは？

玄田 働く基本姿勢の転換は30代が握っていると考えたからです。30代は、仕事でもプライベートでも、転機となるさまざまな選択を迫られる年代。職場では、中堅として、若手とベテランの間で仕事に集中する。20代に身につけた経験や知識を武器に転職や独立を考えたり、勉強をし直したいと考える人もいるし、結婚や出産など人生の大きな選択も集中する。また、今の30代が社会に出た2000年代は、日本の伝統的雇用システムが大きく揺らいだ時期。若者に広がる働くことへの不安を払拭するには、今の30代が、前を向き、充実した職業人生を歩んでいく姿を見せることが大事だと考え、その新たな挑戦や選択のために必要な情報を「地図」にしようと考えたんです。

ところで、会長の30代はいかがでしたか。**神津** 20代の終わりに労働組合の役員になって、30代前半で「連合アタッシェ(外務省との間の官民交流の一環で外交官として在外公館に派遣される労働組合役員)」として、バンコクの日本大使館に家族とともに赴任しました。主

ろいろな力を引き出してくれると…。

神津 連合は10月から、適切に36協定を結ぼうという「Action! 36」キャンペーンをスタートしました。36協定は、締結にあたって業務量の棚卸しや人員体制、労働時間管理について、労使で話し合うことにこそ意味がある。広く社会にアピールするために、3月6日を「36(サブロク)の日」として日本記念日協会に登録申請し、認定されました。

玄田 なるほど。まさにコミュニケーションを深めようという運動なんですね。

村上 最後に労働組合に期待することは？

玄田 村上さんが執筆した第11章に、非正規労働者から「労働組合に入ったら何をしてくれるの」と聞かれた組合役員が、「それを一緒に考えましょう」と答えたという話があります。私も、希望学の中で、「してあげる」というスタンスではダメだと気付かされたんですが、労働組合はそのことととくに気付いていたのだとうれしくなりました。

労働組合への期待は10数年来、変わっていません。「ウィーク・タイズ(緩やかなつながり)」を広げてほしいということ。労働組合って「一致団結!」のストロング・タイズのイメージが強いのですが、実は職場や職種を超えて横にも緩くつながれる組織。自分がモヤモヤと思っていたことを、みんなも思っっていたと発見できる。そんな誰にでも開かれたつながりの場であって

くれることを期待しています。**村上** ありがとうございます。



玄田有史

東京大学社会科学研究所教授

1964年生。労働経済学専攻。著書に『仕事のなかの曖昧な不安—揺れる若年の現在』(中央公論新社)、『危機と雇用—災害の労働経済学』(岩波書店)、『雇用は契約—雰囲気には負けない働き方』(筑摩書房)、編著に『人手不足なのになぜ賃金が上がらないのか』(慶應義塾大学出版会)など。